

中学校における音楽科授業の位置づけと、音楽科教員に求められる指導力

—合唱指導を通じた生徒のソーシャルスキル獲得の事例分析—

教育学研究科
芸術教育専攻 音楽科教育学領域
福田 純也

はじめに

学習指導要領の改訂ごとに教科としての存続が話題となる音楽科。学校現場においても、生徒や保護者から「入試にないのに」「音楽家になりたいわけじゃない」「将来役に立たない」などという言葉を目にする。「音楽の授業」では、何を学ばせることが重要なのか。音楽の授業の多くは「表面的な芸術性を求めた演奏」を目指した授業になってしまっているのではないだろうか。また、多くの教員や保護者が、「素晴らしい演奏をさせる」音楽科教員を「良い教師」と評価しているのではないだろうか。技術面の指導は重要である。だが、指導要領には、「創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身につけるようにする」とあるが、「芸術的で素晴らしい演奏をできるようにする」というような内容は示されていない。しかし、よりよい演奏を目指す授業が多く行われているように感じる。この原因は、音楽教員自身がそのような環境で育ってきているということや、周囲の大人が「良い演奏をすることを求めている」からではないだろうか。それにより、生徒の学びよりも、音楽科教員の価値観を押しつける授業になってしまうのではないだろうか。結果、「音楽は演奏するだけで学びがない」「音楽の授業なんかやっても意味がない。」と言われるのである。教員であるならば、音楽を通してどのような生徒を育てたいのか、何を学んでほしいのかを考える必要があるのではないだろうか。また、数多くの指導の研究があるにもかかわらず、教科の学びを疑問視されるのであれば、視点を変えて教科の学びについて研究する必要があると考えた。

そこで、音楽的な学びの中で副産物のように身につくソーシャルスキルに焦点を当て、その学びを証明することが、中学校における音楽科教育の必要性を訴える上で重要なことであると考え、本研究に取り組むことにした。

本研究の目的

- 中学校での音楽科教育の重要性の検証
- 音楽科教員として授業で意識すべき点の確認
- これまでの実践を振り返り、整理することで今後の授業をより学びの深いものへと再構築するという3点である。

研究の概要

本研究では、授業における学びを、「音楽的な知識や技能」以外の「コミュニケーション能力」「他者理解」「こだわり」の3点に設定した。これらの能力を磨くことで「問題解決能力」を身につけ、これからの社会を生き抜く、社会で活躍することができる人材の育成に、音楽の授業を通して貢献することができると考えた。また、それらを指導する音楽科教員に求められる能力を「社会性」「生徒指導力」「洞察力」「確かな専門性」と設定し、授業における様々な場面で求められる能力の整理を行った。

研究の方法

「校内合唱コンクール」の指導を中心に、研究を進める。

4月にアンケートを行い、授業に対してどのようなイメージをもっているか、生徒の現状を把握し、10月末に行われる校内合唱コンクールの指導を通してどのように変化するのかを、コンクール後に再度アンケートを行い調査した。

教員に求められる能力に関しては、合唱コンクールの授業や行事の運営を通して、より学びある授業であり、行事にするために必要であると思われる能力についてまとめた。